

# 伏木の歴史と文化

－伏木曳山祭を中心に－

令和8年5月

伏木曳山祭実行委員会

# 伏木の歴史と文化

－伏木曳山祭を中心に－

## はじめに

「伏木神社春季例大祭」が行われる伏木地区は、富山県高岡市の北東部に位置し、小矢部川左岸の河口に沿って富山湾に面している。毎年5月の第三土曜日とその前日に行われる祭りは、昼は美しい花傘を広げた7基の花山車が町を巡行し、夜には提灯山車へと姿を変えてクライマックスの曳山同士の激突「かっちゃ」（ぶつけあうという意味）が行われる。このため地元では、この祭りのことを「けんか山」とよび親しまれている。

これまで伏木の曳山に関する研究は、直為範氏<sup>1)</sup>や富山大学人文学部文化人類学研究室<sup>2)</sup> 正和勝之助氏<sup>3)</sup> などの刊本の中で取り上げられてきており、曳山の沿革や構造・運営、曳山の形態と行粧などについてうかがい知ることができる。また近年は、伏木地域の「本町」<sup>4)</sup>「上町」<sup>5)</sup>「中町」<sup>6)</sup>などの山町においても、個別に町内の曳山の歴史について調査しその変遷を纏められている。

本稿ではこれらの先行研究をあらためて検証し、伏木の成り立ちから現在までの歴史的成立過程をたどることにより、伏木曳山祭の背景と民衆に与えた影響を考察する。なお、調査に当たっては、令和6年(2024)元旦の能登半島地震で被災した建物や蔵からの史資料も収集し、新資料の発掘と聞き取り調査などを進めながら、祭りの記録としてあわせて後世に伝えていきたい。

## 1. 伏木の歴史的環境

### 1.1 律令時代以前

古墳時代の伏木周辺には、高岡市太田の桜谷古墳群をはじめ伏木台地の古墳群、岩崎古墳群、国分山古墳群など二上山の北縁で多くの古墳が発掘されている。特に桜谷古墳は、県内最大規模の前方後円墳で、5世紀初頭を下らないと考えられている<sup>7)</sup>。古墳の埋葬者は誰かわからないが、古墳の規模から武内宿祢の孫の伊弥頭国造大河音足尼すくねと関係が深いことが推測できる<sup>8)</sup>。

『日本書紀』には「越(国)」に関する記載がたびたび見られ、この時代は越前から越後にかけて「越」<sup>9)</sup>とよばれる一つの文化圏を形成していたと考えられる。

## 1.2 律令時代

『続日本紀』大宝2年(702)3月17日の条に「分越中国四郡属越後国」とあり、越中国(砺波・射水、婦負、新川／頸城、古志、蒲原、魚沼)のうち四郡を分けて越後国に属させており、この記載が「越中」の初見である。また、『続日本紀』の天平4年(732)9月5日の条に「外従五位下田口朝臣年足為越中守」とあり、田口年足を越中守に任ずるとしており、この記載が「越中国司」の初見である。越後国と分立後の越中国の行政区画は、天平13年(741)に能登国(羽咋、能登、鳳至、珠洲)を越中に併合し、天平宝宇元年(757)には再び分立させている<sup>10)</sup>。その間の天平18年(746)から天平勝宝3年(751)にかけて大伴家持が、「従五位下大伴宿祢家持為越中守」<sup>11)</sup>として赴任し、この地で詠んだ223首の歌が『万葉集』に収められている。そのためこの地には、多くの名所・旧跡がみられる<sup>12)</sup>。

越中の国府の場所は、現在の伏木測候所から出土した「円面硯」や、家持の万葉歌「朝床に聞けば遙けし射水川 朝漕ぎしつつ歌う舟人」(巻19 4150)、『日本紀略』大同5年(810)5月27日の条の、「渤海国正使高多仏を越中に移し、史生・習語生らに渤海語を習わせている」ことなどの史資料から、国内巡行の拠点や海陸交通の要衝、対外交渉の場としての役割を求め射水川(小矢部川と庄川の合流河川)河口の伏木に置いたと考えられる。伏木の地名は、平安時代の和名類聚抄に「射水郡 布師郷奴乃之」とありこれに「城(キ)」を添えて「フシキ」とよんだり、国庁址を「府敷」とよんだという説もある。現在も伏木には、臥(布師)浦、古国府、古府、国分、一宮などの国府に関連する地名が残されている。

## 1.3 中世：武家の時代

伏木では、兄の源頼朝から逃れて北陸道を通って奥州に落ちのびた源義経一行の伝説が雨晴海岸の「義経岩」や小矢部川沿いの「如意の渡し」の場面とともに語り継がれている<sup>13)</sup>。建久2年(1192)源頼朝が征夷大將軍として鎌倉に幕府を開くと、越中の政治の中心はそれまで国府が置かれていた伏木から、守護所が置かれた放生津(射水市)へと移っていった。承久の乱(1221)の際に北陸道大將軍となった北条(名越)朝時は2代執権北条義時の次男であり、平定後も北陸道に強大な支配権を確立した<sup>14)</sup>。そしてこれ以降、幕末の名越時有にいたるまで名越家が越中の守護職に任じられていたと考えられる。

南北朝・室町時代には、越中の守護職は、桃井直常→斯波義将→畠山基国と変遷し以後代々畠山氏が世襲した。畠山氏は、守護代の神保氏(射水・婦負郡)、遊左氏(砺波郡)、権名氏(新川郡)にそれぞれの地域を統治させ、越中は守護代による三分統治が行われた<sup>15)</sup>。神保氏のもとで射水郡の放生津は、明応2年(1493)「明応の政変」で廃された10代將軍足利義材を迎い入れるなど、越中の政治・経済の中心地として栄えていった<sup>16)</sup>。

#### 1.4 近世：勝興寺と加賀藩の時代

伏木の名が再び史料にあらわれるのは、16世紀後半の天正年間、勝興寺住職頭栄(天正8年(1580)寂)が、伏木村からの鳥目二十疋(銭200文)や米6斗の寄進に対する「ふしき村惣中」「ふしき慶心御門徒衆中」への礼状<sup>17)</sup>である。雲龍山勝興寺は文明3年(1471)に本願寺8世蓮如上人が南砺市土山に創建した土山御坊を起源とし、寺号は承久の乱(1221)で佐渡へ流された順徳上皇が勅願所として建立した「殊勝誓願興行寺」を受け継いでいる。戦国の戦乱のなかで、勝興寺は井波の瑞泉寺とともに越中一向一揆の拠点として、寺基は土山から南砺市高窪の高木場、小矢部市末友の安養寺へと移っていった。さらに天正12年(1584)佐々成政の家臣の守山城主神保氏張は、勝興寺にあてた制札の中で「府之分一円令寄進候事」<sup>18)</sup>として国府址と推定される現在の地を寄進し、勝興寺は伏木古国府に移っている。土塁や堀をめぐらした1万坪にわたる広大な敷地は、当時城郭の役目も担っていたと考えられる。

天正13年(1585)には、豊臣秀吉、前田利勝(加賀大守前田利家の子、利長)からも相次いで禁制が出され<sup>19)</sup>寺の既得権が安堵されたことにより、勝興寺は古国府一円に寺内町を形成していった。江戸時代、勝興寺は越中の触頭として、3代当主前田利常の養女「つる」が勝興寺9代良昌に嫁ぎ、勝興寺13代法暢(6代当主前田吉徳の10男)が還俗し前田治脩として加賀藩10代藩主を継ぐ<sup>20)</sup>など、加賀藩との間で緊密な関係を構築していった。

一方、沿岸の伏木村は、勝興寺住職頭栄の「ふしき村惣中」に宛てた礼状から判断すれば16世紀後半の天正年間には村建てされたと考えられ、江戸時代加賀藩の庇護のもと伏木浦をとおして大きく発展していった。なお、その成立過程の背景については、第2章「伏木湊と廻船問屋」で論じていく。

## 2. 伏木湊と廻船問屋

### 2.1 古代：亙理湊

伏木湊は、万葉集で詠まれた「射水川」の河口左岸に位置し、古くから日本海側の海運の拠点として発展してきた。10世紀初め醍醐天皇に撰上された『延喜式』「諸国運送雑物功賃」の条によれば、「越中国海路、自亙理湊漕敦賀津 船賃石別二束二把」<sup>21)</sup>とあり、都への貢納物は海路亙理湊から敦賀津に、ここから陸路で近江塩津に運び、琵琶湖を漕いで近江大津、そして平安京へと運ばれていった<sup>22)</sup>。

それ故に越中国府は、眼下に亙理湊を擁し、荘園などからの物資運搬のため、輸送・交通を重視した立地にあったと考えられる。

## 2.2 中世～戦国時代：伏木浦

武家の時代になると、国府の地位は急速に転落した。それと同時に伏木や亶理湊に関しての文献史料も見当たらなくなり、亶理湊は国府同様に衰退していったと考えられる。亶理湊に代わり越中では、守護所が設置された放生津が、日本海交易の拠点港として発展し町建てに至ったと推察される<sup>16)</sup>。

再び伏木の名が史料で確認できるのは、16世紀後半の戦国時代である。越中の統治を委ねられた上杉謙信の家臣河田長親・鯨坂長実連署制札<sup>23)</sup>によれば、「放生津・伏木浜口并船以下用所可申付事」として、天正4年(1576)頃には伏木は放生津とともに船の御用を申しつけられている。故にこの頃には、伏木浦の村建てが成立していたと考えられる。

## 2.3 近世：加賀藩と伏木湊

伏木は、江戸時代当初から港町として成立していたことは、慶長14年(1609)、前田利長が高岡城築城に際して材木を能登から切り出し、船で伏木・放生津へ着岸させた<sup>24)</sup>ことや、慶長20年(1615)加賀藩が佐渡行きの商売船13艘を許可したことからわかる<sup>25)</sup>。さらに加賀藩は、越中での主要港として神通川を挟んで川西七浦(木町・伏木・氷見・放生津・六渡寺・海老江・灘浦)と、川東七浦(東岩瀬・水橋・滑川・魚津・生地・泊・境)を指定している<sup>26)</sup>。川西津頭の木町は、小矢部川と千保川の合流地点にあり加賀藩から運漕権を独占的に与えられたが、千保川の改修によって木町浦の水深が浅くなり船の着岸に支障をきたすなど、その役割を伏木にとって代わられた<sup>27)</sup>。伏木の戸数については、元和度(1615~1624)26軒<sup>28)</sup>、寛文3年(1663)35軒<sup>28)</sup>であったが、元禄3年(1690)には195軒<sup>29)</sup>と着実に加賀藩の津留政策での廻米積出港として発展していった。そして江戸時代後期の安政5年(1858)になると、524軒(15歳以上2345人)<sup>30)</sup>とさらなる躍進をとげていった。

その発展を支えたのが、伏木湊で渡海船との貢納物を受け渡しする船問屋の存在である。特に寛延2年(1749)の鶴屋善右衛門を筆頭とした西海屋万右衛門・網屋助左衛門・澁谷九郎兵衛・鈴木屋勘右衛門・氷見屋次左衛門・佐ヶ野屋吉右衛門・太田屋宗兵衛の8軒問屋<sup>31)</sup>や安政5年(1858)の能登屋三右衛門を筆頭とした西海屋万右衛門・鶴屋善右衛門・澁谷九郎兵衛・網屋助左衛門・氷見屋次左衛門・太田屋宗兵衛の7軒問屋<sup>32)</sup>の中には、自らも北前船の船主として寄港する湊で安価な商品を買って別の湊で高価に売る「買積み」とよばれる商法で莫大な利益を上げていた。

しかし「一航千両」ともいわれる航海は、常に海難事故との危険と隣り合わせで、そのため彼らは航海の安全や海岸鎮護を祈って、神社に鳥居や灯籠を寄進したり、絵馬を奉納したり、祭りをつかさどったりした。それは地元にとどまらず、廻船問屋網屋伝四郎のように、讃岐(香川県)の金毘羅神社に寄進した慶応元年(1865)8月の銘の石灯籠も残されている。

## 2.4 近代の伏木港

江戸時代後期から明治時代前期にかけて隆盛を誇った北前船は、明治 30 年頃までに徐々に衰退していく。衰退の原因と考えられるのは、一つには北前船の商法である遠隔地による価格格差を利用した買積船が電信の普及により情報共有され利益があげられなくなったこと、一つには汽船や鉄道など交通機関の近代化にともなって、大量の物資をいち早く輸送することができるようになったことなどがあげられる。廻船問屋「鶴屋」が生家の芥川賞作家堀田善衛は、生家が時代の波にのまれ衰退していく様子を小説『鶴のいた庭』<sup>33)</sup>で描いている。

一方、廻船問屋「能登屋」の藤井能三は、三菱商会の岩崎弥太郎に働きかけ、明治 8 年(1875)に三菱商会所有の汽船瓊浦丸(880t)と豊島丸(1190t)を伏木港に寄港させた。これが、近代伏木港の幕開けである。彼は、私財を投じて灯明台や測候所を設置し、『伏木築港論』<sup>34)</sup>のなかで、「日本からヨーロッパへ行くには、伏木港からロシアのウラジオストックへ船で渡って、シベリア鉄道を通る方が近道である。ヨーロッパの国々と貿易を盛んにし、世界と日本を結ぶ役目をする新しい港を伏木に造るべきだ」と論じた。こうして伏木港は、明治 32 年(1899)に外国と自由に貿易できる開場港に指定され、10 月には当時元老であった伊藤博文が視察に訪れている。翌年には、中越鉄道（現氷見線）の高岡・伏木間が開通したのを契機に、中越鉄道伏木線沿線には、北陸人造肥料(日産化学)・北海曹達（東亜合成）・北海工業（日本製紙）・北海電化工業（日本重化学工業）・電気製鉄（JFE マテリアル）などの工場が進出し、伏木港周辺には臨海工業地帯が形成されていった<sup>35)</sup>。

平成 30 年(2018)5 月に北前船寄港地として文化庁から日本遺産に追加認定をうけた伏木港は、国際海上貨物輸送網の特定重要港としてだけではなく大型クルーズ船の寄港地として、商業港から工業港・観光の港へとさらなる発展をめざしている。

## 3. 伏木の神社

### 3.1 気多神社

国府跡から西北へ 1km、伏木一宮の地に気多神社がある。祭神は、大己貴命（おおなむらのみこと 大国主命）、（高志）ぬなかわひめ 奴奈河姫命、合祀としてくくりひめ 菊理姫命（白山比咩神社）ことしろぬし 言代主命（恵比寿様）が祀られている。社伝によれば元正天皇の養老元年（717）に勅願され、天平宝宇元年（757）に越中から能登を分立した頃に、能登から分霊をこの地に勧請したと伝えている。由緒では、『延喜式神名帳』の写本「九条家本」には、越中国 34 社のうち気多神社を名神大社と記されている。

古代、山陰道から北陸道にかけて「気多」の地名や神名が多くみられる。西からあげると、出雲国（島根県）気多嶋→因幡国（鳥取県）気多郡→但馬国（兵庫県）気多

大社→加賀国（石川県）気多御子社→能登国（石川県）気多神社→越中国（富山県）気多神社→越後国（新潟県）居多神社<sup>36</sup>）である。また、「気多の神」は出雲大社の祭神である大己貴命（大国主命）を祀っており、出雲から越後頸城平野まで対馬海流に沿って、律令時代以前には深いつながりがあったと考えられる。それは、これまで出雲地方にしかみられなかった四隅突出古墳が、昭和 49 年に富山市杉谷（呉羽丘陵）から発見されたことでも裏付けられる<sup>37</sup>）。

さらに、『先代旧事本紀』巻 4「地祇本紀」によれば、信濃国諏訪大社の祭神である建御名方神たけみなかたのかみは大国主命と（高志）沼河姫の間に生まれたとあり、『古事記』では、建御名方神は大国主命の次男として、父の国譲りに反対し建御雷神たけみかづちのかみと戦って敗れ出雲から諏訪へとどまったとある。これはあくまでも神話の世界であるが、山陰道の出雲との交流が「潮の道」をたどり北陸道の日本海側を越えて、信濃まで到達したことをうかがい知ることができるのではないだろうか<sup>38</sup>）。

### 3.2 伏木神社

曳山祭が実施される「春季例大祭」をつかさどる伏木神社の社地は、波浪の浸食を受けて幾度か遷り、文化 10 年(1813)9 月 24 日に「蔵ヶ浜」（伏木村の海辺）から一宮村の現在の地（国府別館の跡地）に遷座した<sup>39</sup>）。祭神は天照皇大御神、豊受大御神あまてらすおおみかみ とようけのおおみかみ、合祀として応神天皇、神功皇后、加具土神（火神）、菅原道真が祀られている。社伝によれば、聖武天皇の御代天平年中に海岸に奇瑞があったので当時の国守が伊勢大神宮より分霊を勧請し、海岸鎮護のため、布師浦の蔵ヶ浜と称する浜地に一社を建立したとある。由緒では明治 16 年(1883) 8 月に伏木神社と改称するまでは神明社と称し、近郷 11 ヶ村の総社として崇められていた<sup>39</sup>）。現在の神社は、昭和 56 年(1981)6 月に失火により焼失し昭和 58 年(1983)に再建されている。

文化 10 年(1813)の遷座にあたり、神輿渡御に曳山が追従したとの言い伝えがある。真偽の程は定かではないが、『越中国高岡 関野神社祭礼繁盛略図附録』<sup>40</sup>）には、傘鉾＝母衣武者＝神輿＝曳山の様子が描かれており、伏木においてもこの年に曳山の創建や母衣武者行列が実施されていても不思議ではなからう。

### 3.3 その他の神社

伏木地域にはこの 2 社の他に、神明社として天照皇大御神を祀る串岡・新島神明社、矢田神明社や八幡社として応神天皇を祀る古国府八幡社、古府八幡社、天満社として菅原道真を祀る国分天満社など多くの神社があり、それぞれの神社は、村の開発発展とともに建立されていった。

また、海にかかわる神社として、金刀比羅社は航海の守護神として崇敬され、魚取社は海岸の魚業者により祀られており、船絵馬や灯籠、狛犬、鳥居、玉垣などが海運業者によって奉納されている<sup>41</sup>）。このほかに現在玉川公民館に鎮座している稻荷大神

は、海岸の浸食を防ぐ波除神社<sup>42)</sup>として奉られていたと考えられる。

玉川公民館には稲荷大神のとなり不動明王の石仏が鎮座している。玉川遊郭内の守護神として、明治44年(1911)4月に伏木矢田村からの不動明社の堂宇を移して、この地で遷座式が行われた。

## 4. 伏木曳山祭

### 4.1 神を招くカタチ

日本には古代より「山」は畏怖に満ちた存在であり、日常世俗と違った聖なる場所であった。そこには「山」自体を神とする信仰があり、大和の三輪山や駿河の富士山越中では大伴家持が詠んだ「立山に降りおける雪を常夏に見れども飽かず神からならし」(万葉集巻17 4001)に代表される立山など、各地にご神体とよばれる神聖な「山」があった。この「山」の神様(霊力)を里や町に迎えるために、人々は神木を山から曳き出したり、下界に人工の「山」を造り築山として祭壇を設けた<sup>43)</sup>。

築山の神座に車輪をつけて曳いたのが、曳山である。神を迎えるための標山は、山型「ヤマ」の上に柱の喬木「ホコ」をたて、鉾の頂上に神が降臨するための目印の依代「ダシ」をつけたものである。「ダシ」はかつて「ひげこ」とよばれる作り物を掲げたものが始まりであるといわれ、伏木の曳山では丸い目籠の形で花傘の内側に取付けられている<sup>44)</sup>。

### 4.2 越中の曳山

越中の曳山の初見は、慶長14年(1609)に前田利長が高岡町民へ与えた高岡御車山である<sup>45)</sup>。その後、江戸時代中期から明治にかけて、放生津・城端・八尾・石動・岩瀬・海老江・伏木・氷見・福野・大門など周辺の港町や宿場町、商業地に広がっていった。これらの曳山は町の祭りであり、経済的な発展とともに造られ、町衆の経済力の象徴であった。曳山の製作や形態は、在地の工匠たちである井波の彫刻師、城端や高岡の塗師や人形師・金工、氷見や放生津の宮大工たちによって支えられていた。

現在「山・鉾・屋台行事」は、富山県内の24地域で行われており<sup>46)</sup>、その中で花傘山は9地域で行われ、形態は高岡御車山型と放生津曳山型に大別できる。その転機になったのが、安永の曳山騒動である。安永4年(1775)放生津の祭礼の際に放生津側が、加賀藩が規制していた御車山類似の山車を曳きだしたので、高岡二番町の津幡屋与四兵衛が一命をかけて阻止した事件である<sup>47)</sup>。この騒動以後、放生津は車輪ではなく「下山」「中山」「上山」の三層それぞれに装飾を廻らせ、複数の高欄が廻る「重層構造」の曳山を造った。この放生津の曳山の形状や囃子、夜の提灯山を参考にした曳山が、伏木、氷見、海老江など富山湾に面した港町にみられる。

### 4.3 伏木の曳山

現在伏木には、7基の山車がある。形態は、昼は『花傘鉾人形山』通称「花山車」、夜は「提灯山車」に変わる。上山には重層式の「高欄」を構え鏡板を仕立て、「福神」（本座）と前立人形の「唐子」（本町山車だけは「和子三番叟」）を据えている。下山には大幕を張り廻らし（中町山車だけは「伊達柱に幕板」）車輪は「輻車」（<sup>やぐるま</sup>創設時は「板車」）で、長手（<sup>ながて</sup>轆）に「付長手」を縛り付けている。しかしこの7基の山車は同じ時期に造られたものではなく、表1に見るように文政3年(1820)の中町に始まって明治25年(1892)の湊町まで伏木村の開発・発展とともに順次造られていった。ただし、元治元年(1864)に造られたといわれる十七軒町の山車は、明治の大火で焼失したとされたが、平成27年(2015)に復元されている<sup>48)</sup>。

山町名	中町	上町	本町	寶路町	石坂町	湊町	十七軒町
製作年	文政3年 (1820)	文政7年 (1824)	天保12年 (1841)	天保12年 (1841)	万延元年 (1860)	明治25年 (1892)	平成27年 (2015)復元
標識	千成瓢箪	笹竜胆	鈷鈴	重ね分銅	壽の字	胡蝶	法螺貝
福神	福祿寿	布袋	弁財天	恵比須	大黒天	毘沙門天	寿老人
鏡板	郝大通	黄石公と張良	漢の武帝	西王母	菊慈童	黄石公と張良	鶴と亀

表1（高岡市観光協会発行 けんか山パンフレットより抜粋）

建造に着手した直接の動機は、鎮守の神明社（後の伏木神社）が波崩れの災いに遭って、文化10年(1813)に現在の地へ遷座した機会に求められる<sup>39)</sup>。しかしそれ以前に近隣の町や村で曳山が相次いで創建されるにいたり、伏木でも上町の福神「布袋」の面像の付根に天明元年(1781)の銘が墨書されていたことから、この頃には曳山創設の気運が高まっていたと考えられる。なお、上町の福神「布袋」は、廻船問屋能登屋三右衛門の座敷神として曳山ができるまで祀られていたという伝承が残っている。

伏木曳山の福神は、表1の七福神である。製作された年代は、天明元年(1781)の上町から明治25年(1892)の湊町の「毘沙門天」まで100年以上ものタイムラグがあるにもかかわらず、統一したモチーフが採用されている。それは、鏡板（後屏）の主座や高覧の彫刻にも、共通して儒教や道教の思想の影響をうけて製作されていることから、伏木には、資金を提供できる北前船で栄えた廻船問屋を主として、湊稼ぎを生業とする人々の生活共同体が成り立っていたことがわかる。

### 4.4 伏木曳山祭の歴史

#### (1) 祭礼の実施日

伏木曳山祭は、当初伏木神社の「秋季例祭」として秋に行われていた。いつ頃から山車が曳きまわされるようになったか定かではないが、現在の地へ遷座<sup>39)</sup>した翌日9月25日に実施されていた。ただし、明治43年(1910)からは、前年の9月29日に当時の皇太子殿下（のちの大正天皇）が伏木町へ行啓されたのを記念して、秋季例祭

は9月29日に実施されるようになった<sup>49)</sup>。

大正6年(1917)からは、前年秋にコレラが流行し11月9日に延期した秋季祭礼が強風雨のため曳山が中止になったことから、氏子総代の協議<sup>49)</sup>により9月29日の秋祭りを5月15日の春祭りに変更した。そして戦時中の中止をはさみ昭和21年(1946)から再開された祭り<sup>50)</sup>は、令和3年(2021)までこの日で実施された。

現在、令和4年(2022)からは、祭りの人手確保と伝統の存続を図る目的として、伏木神社と奉賛会で協議し高岡市文化財審議会の承認を経て、5月の第三土曜日とその前日に執り行われている。

## (2) 祭礼の行事

5月の第三土曜日の前日は、「大祭式」の後、「神輿渡御」として神輿とこれに随従する母衣武者行列が氏子の家々を廻る祭事がおこなわれる。母衣武者とは、神幸を警固する役目を担う武者であり、伏木の祭礼では各山町から選ばれた武者に扮した小学生12名がつとめる。

午後7時からは「宵山ライトアップ」がおこなわれる。山倉前に各山町の花山車が整列し、スタンプラリー<sup>51)</sup>の表彰式やお囃子の演奏、今年の役員の紹介などがおこなわれ、翌日の曳山の巡行を盛り上げる。

第三土曜日におこなわれる山車の奉曳の順路は、町内を2つに分けて、1年ごとに昼山車と夜山車を交互に巡行している。(今年花山車で廻った地域は、翌年は提灯山車で奉曳する。)しかし昭和24年(1949)までは、全町内を花山車で廻った後、提灯山車にきりかえて曳きまわったため昼夜2回奉曳していた。昼夜交互に1回になったのは翌、昭和25年(1950)に高岡市から曳山祭に補助金が支給されるようになり、かわりに観光を目的として新町・古国府境まで曳山を曳くことになったため、奉曳する地域の範囲が広がったためだといわれている。

## (3) 祭礼の運営

伏木曳山祭では、祭り全体の運営に当たる山町を「当番町」とよぶ。「当番町」の総責任者を「総々代」とよび、各山町(十七軒町を除く)では6年ごとに持ち回りで担当する。全町会議の記録によれば「総々代」の呼び名は昭和36年(1961)からで、それまでは「委員長」とよばれていた。また、当年の各山町の代表者を「総代」とよび、「委員」とともに祭りの運営に携わっている。この運営組織がいつからできたか定かではないが、昭和6年(1931)に臥浦(現旭町)に6基の曳山倉庫を建設<sup>49)</sup>するにあたり、伏木区會が管理していることから伏木区會に組織の前進があったと考えられる。

戦後は、「曳山車委員会」に引き継がれ、昭和50年(1975)には「伏木曳山保存会」、平成14年(2002)には「伏木曳山祭実行委員会」が結成され、行政機関などとの連絡調整にあたっている。

#### (4) 「けんか山」 かつちや

山車と山車をぶつけ合う「かつちや」は、いつごろ、どのような形で始まったかは定かではない。『富山日報』明治43年5月27日の記事には、「けんか山」としてではなく、「射水郡伏木港にては古来より秋季祭礼即ち九月二十五日には提灯曳山として有名なる六本の山車を練廻る慣例なり」49)、大正9年5月7日の記事には、「一本の山車に500張に及ぶ提灯をつけた提灯山車を以て有名なる曳山」49)とあり、明治時代の後半から大正時代にかけては、伏木曳山祭は提灯山車として知られていた。

伏木曳山祭の「喧嘩」の初見は、『富山日報』昭和4年5月17日の記事「伏木祭りの山車の喧嘩 十六日午前二時半に至り本町の分岐点に於いて各山車は各々自町に曳き戻らんとした處、僅かなるから石坂と中町の山車が押し合いを始め、果ては提灯の打ち落としや投石を始め負傷者が出たので、伏木署は両町の代表者を招き仲裁の上、各々引取る事とし三時三十分解散」49)であり、当初は力づくで山車を押し付けて進路を確保しようとしたのがはじまりだと考えられる。さらに、『高岡新報』昭和9年5月10日の記事には「伏木曳山の囃子金澤から放送」49)として、町会議員の鶴谷鶴太郎氏に引率された湊町はやし方17名が喧嘩場面の活発な所をラジオ放送し、同年5月16日の記事には「火事まで飛び出た 伏木喧嘩山車祭 人出は二万突破」49)として、昭和初期には伏木曳山祭は「喧嘩山車」として知られるようになった。

昭和21年(1946)から再開された祭り50)は、昭和30年代前後の頃まではところかまわず昼にも山車をぶついたり、相手の側面にぶつける「横山」・「横ナグリ戦法」や2基の山車で相手を挟み撃ちにする「挟撃」による示威的行為がみられた。そこで昭和32年(1957)の全町会議で、「余興中、横山に突当てる事、挟撃の禁止」の誓約書が提示され、余興の場所も昭和38年(1963)に原則4ヶ所52)に固定されるようになり、昭和60年(1985)からは、警備上の問題も含め、本町広場と法輪寺前の2ヶ所で実施されるようになった。(ただし、令和6年(2024)の能登半島地震以降は、道路復旧などの影響により1ヶ所で実施している。)

#### (5) 喧嘩の勝敗

伏木曳山祭の魅力の一つは、重さ8tにもおよぶ提灯山車が、先端に付長手とよばれる檜木の太木を「大砲」に見立て、激しくぶつかり合う「かつちや」(「余興」ともよばれている。)を繰り広げているところにある。2基の山車がぶつかった瞬間に地響きを立てて火花を散らし提灯が揺れる迫力は、港町伏木の心意気をあらわしたものであり、観客からも大きな歓声があがり伏木の町は最高潮に包まれる。

地元では、長手や枕木を本体の山車に取付ける作業を「算段」とよぶ。重さ8tもの山車がぶつかる合う際に一本の付長手にかかる衝撃は大きく、それを支えるロープの固定「算段」はとても重要になってくる。各山町には代々受け継がれてきたロープの縛り方「算段」があり、それは江戸時代より北前船の帆をロープで柱に縛る際の技

法から綿々と伝わっているのではないだろうか。

筆者は、10年余りにわたりケーブルテレビで「余興」時の解説をしているが、よく聞かれるのは「今の勝負、どちらが勝ちましたかね」という質問である。「喧嘩」には勝敗がついてまわるが、伏木曳山祭の「けんか山」には明確な基準はない。あえて勝敗をつけるとすれば、その年の一連の祭礼行事を滞りなくおこない、無事に山倉に山車をおさめ、御神楽を奏でた町内こそが勝者ではないだろうか。それはあたかも、廻船問屋の北前船が、伏木湊に無事に帰ってくるかのように……。

### まとめ

古代、万葉の地として越中の政治・文化の中心として栄えてきた伏木は、江戸時代には、北前船の船主である廻船問屋の人々によって繁栄していった。彼らが担い手となり、曳山造りが始められてから、多くの先人たちの非常な苦勞と努力により「伏木曳山祭」は、現在に引き継がれている。

令和7年(2025)12月には、台北市で開催された「青山王祭」に伏木曳山が参加した。この祭りに祀られていた神様「張滾<sup>ちやうこん</sup>」<sup>53)</sup>は、中国大陸から伝わった道教の神仙をモチーフとしており、それは同じ時期の19世紀に造られた伏木曳山の高欄や鏡板にも中国の故事や神仙を題材として多く用いられている。この時期に大陸からの文化が台湾や日本にもたらされ地方にも浸透していたことは、当時の廻船問屋の北前船交易を通して培われた文化水準の高さを伺い知ることができる<sup>54)</sup>。

祭りをつかさどる廻船問屋は、江戸時代の石田梅岩の心学『都鄙問答』の一節「実ノ商人ハ先も立、我モ立ツコトヲ思フナリ」<sup>55)</sup>を借りれば、商人は正直を重んじ必要以上に儲けたお金は社会に還元すべきと説かれ、伏木ではこの教えの社会への還元の一つが曳山であったと考えられる。さらに明治時代、廻船問屋「能登屋」の藤井能三は、私財を投じて富山県初の小学校を建設し<sup>56)</sup>、近代港に向けて灯明台や測候所を設置するなどの社会事業に貢献した。いまま港町伏木には、多くのボランティア団体が活動を行い、その精神を受け継いでいる。

令和6年(2024)元旦に起きた能登半島地震では、伏木でも多くの建物や道路が被災した。災害の記録を紐解けば、伏木神社が遷座した翌年の文化11年(1814)4月には、伏木村340軒中約7割にあたる230軒ほどが焼失する火災が起こり、勝興寺は翌日には罹災者に対して米10石を施与している<sup>57)</sup>。そしてこれ以降も今日までに伏木は、何度も火災や地震などの災害に遭っており、そのたびに復興してきた。その背景には、当時も今も普遍的に人々の精神的な支柱となり、人と人との心をつなぎ希望の灯をあたえ元気づけてきた「祭り」の存在がかかせないものとなっているのではないだろうか。

## 註

- 1) 直為範『伏木の山車』（伏木文化会、1968年9月）
- 2) 『伏木の曳山』（富山大学人文学部文化人類学研究室、1988年5月）
- 3) 正和勝之助『伏木曳山祭再見』（伏木文化会、1998年5月）
- 4) 中谷友幸『伏木本町曳山資料』（伏木本町曳山保存会、2011年8月）
- 5) 『上町のあゆみ』（上町花山車保存会、2014年3月）
- 6) 『旧中町曳山想起』（伏木旧中町曳山保存会、2021年3月）
- 7) 『高岡市史 上巻』76頁～99頁 参照
- 8) 『先代旧事本紀』卷十「国造本紀」成務天皇9月の条
- 9) 米澤康「大化前代における越の史的位罫」（『越中古代史の研究』所収、3頁～32頁参照、越飛文化研究会、1965年10月）
- 10) 『続日本紀』天平13年(741)12月10日の条「能登国并越中国」、  
『続日本紀』天平宝字元年(757)5月8日の条「能登、安房、和泉等国依旧分立」
- 11) 『続日本紀』天平18年(746)6月21日の条
- 12) 伏木の地で詠まれた代表的な歌「もののふの 八十をとめらが 汲み乱ふ 寺井  
の上の かたかごの花」（卷19 4143）は、昭和27年度より2月16日の伏木小学  
校の創校記念日に4年生の児童によって舞われている。
- 13) 「義経記」（『高等学校 標準国語 B』86頁～89頁、第一学習社）
- 14) 『吾妻鏡』貞応2年(1223)10月1日の条「北陸道守護成敗条々事、(中略)、被仰式  
部丞朝時主云々」
- 15) 「守護支配と越中」（『高校生のためのふるさと富山』所収、18頁・19頁、富山県  
教育委員会、平成25年3月）
- 16) 「近世放生津町の成立と変遷」（『放生津八幡宮祭 曳山行事・築山行事総合調査報  
告書』所収、32頁～34頁、射水市教育委員会、2020年3月）
- 17) 『越中古文書』（「古国府勝興寺文書」後五月十六日の条、八月廿八日の条、加越  
能文庫、金沢市立図書館）
- 18) 「天正十二年十二月 神保氏張、勝興寺宛制札」（『富山県史 史料編Ⅲ』49頁）
- 19) 「天正十三年七月 羽柴秀吉、越中国古国府寺内禁制」（『高岡市史 上巻』607頁）  
「天正十三年閏八月 前田利長、勝興寺宛禁制」（『富山県史 史料編Ⅲ』60頁）
- 20) 『加賀藩史料 第8編』（「勝興寺御帰俗一卷」（明和六年）正月廿六日の条）
- 21) 『延喜式・卷二十六、主税上』「諸国運送雑物功賃」の条
- 22) 『富山県史 通史編Ⅰ』571頁～572頁 参照
- 23) 『新潟県史・資料編4・中世Ⅱ』636頁 所収（「吉江文書」、六月廿日付連署状）
- 24) 『高岡市史 上巻』671頁 所収（「新山田畔書」）
- 25) 「伏木浦より出船」卯二月廿七日の条（『藤井家文書』、伏木図書館）

- 26) 『高岡市史 中巻』 28 頁～29 頁 参照
- 27) 『高岡市史 中巻』 63 頁～64 頁 参照
- 28) 『越中国射水郡伏木浦旧記』(加越能文庫、金沢市立図書館)
- 29) 『加越能三州諸郡町并宿駅家数等』(加越能文庫、金沢市立図書館)
- 30) 「伏木放生津家数等相調理書上申帳」(『富山県史 史料編Ⅳ』 133 頁)
- 31) 「伏木問屋定諸口銭庭定書品々帳」(『藤井家文書』、伏木図書館)
- 32) 「伏木放生津家数等相調理書上申帳」(『富山県史 史料編Ⅳ』 137 頁)  
堀久助翁回顧録(「7 軒問屋のこと」7 頁、昭和 58 年 5 月、伏木文化会)によれば  
現在の家名は、能登屋三右衛門は藤井家、西海屋万右衛門は堀家、  
鶴屋善右衛門は堀田家、・澁谷九郎兵衛は渋谷家、網屋助左衛門は岩坂家、  
氷見屋次左衛門は稲尾家、太田屋宗兵衛は太田家である。
- 33) 堀田善衛「鶴のいた庭」(『堀田善衛全集 5』) 3 頁～16 頁所収 筑摩書房 1974  
年 10 月)
- 34) 藤井能三『伏木築港論』(明治 24 年(1891)、伏木図書館)
- 35) 『みなと伏木 100 年のあゆみ』(伏木港開港 100 周年記念誌実行委員会、平成 11  
年 8 月)
- 36) 浅香年木「気多の神名・地名分布」(『北陸の風土と歴史』所収、58 頁、山川出版  
社、昭和 52 年 2 月)
- 37) 『富山県史 通史編Ⅰ』 151 頁～152 頁 参照
- 38) 斎藤盛之「信濃一宮 諏訪神社」(『一宮ノオト』所収、54 頁、思文閣出版、  
2002 年 12 月)
- 39) 尾崎定業『伏木郷土史談』 18 頁～19 頁 参照(昭和 11 年 6 月)
- 40) 高岡市博物館蔵、明治 16 年(1883) 木版
- 41) 金比羅社は江戸時代後期には小矢部川左岸に鎮座していたが、明治 24 年(1891)8  
月 9 日に現在の地に遷座し、長寿丸の絵馬や文久 3 年(1863)桶屋勘三郎寄進の灯  
籠、慶応 3 年(1867)能登屋日吉丸与重郎寄進の鳥居などが確認できる。
- 42) 同様の神社として、万治年間(1658～1661)に創建された、築地の波除稻荷神社が  
ある。社伝によれば、築地一帯の埋立て工事が波浪により難航を極めた際、稻荷  
明神の像を祀ったところ波浪が治まり工事が無事完了したと言われている。
- 43) 現在県内では、毎年 4 月 23 日に二上射水神社で、10 月 2 日に放生津八幡宮で築  
山行事が執り行われている
- 44) 折口信夫「髯籠の話」(『折口信夫全集 第二巻』所収、206 頁～208 頁、189 頁、  
中央公論社 昭和 40 年 12 月)
- 45) 『高岡市史 上巻』 687 頁～688 頁 参照
- 46) 「富山県内の山・鉾・屋台行事一覧」参照(『放生津八幡宮祭 曳山行事・築山行  
事総合調査報告書』所収、13 頁、射水市教育委員会、2020 年 3 月)

- 47) 『高岡市史 中巻』 404 頁～409 頁 参照  
津幡屋与四兵衛は、御車山の由緒と格式を守った義人として、高岡町民から感謝され、関野神社境内に祠を立てまつられている。今も津幡屋与四兵衛を称える与四兵衛祭が毎年4月3日に執り行われている。
- 48) 十七軒町の山車は、現在伏木コミュニティーセンターに常設展示されている
- 49) 『鴻爪集』(明治18年～昭和13年の新聞記事の抜粋、伏木図書館蔵)  
 <富山日報> 明治43年(1910)5月27日……「伏木曳山車の売却説」  
 明治43年(1910)9月25日……「伏木秋祭りの変更」  
 大正6年(1917)5月7日……「氏子総代集会協議」  
 大正9年(1920)5月7日……「伏木の提灯山」  
 昭和4年(1929)5月17日……「伏木祭りの山車の喧嘩」  
 <高岡新報> 昭和6年(1931)3月8日……「伏木町に山車 蔵」  
 昭和9年(1934)5月10日……「伏木曳山の囃子金澤から放送」  
 昭和9年(1934)5月16日……「火事まで飛び出た 伏木喧嘩山祭  
 出は二万突破」
- 50) 「富山新聞」昭和21年5月17日の記事
- 51) 後世に伝える祭りと普及をめざして、平成21年(2009)に伏木曳山祭実行委員会の城光茂氏が発案、野口安嗣が運営に協力し、翌年から伏木小学校4年～6年生全員に7基の山車と伏木神社を入れた図案を描いてもらい、学年代表の作品を表彰する。各学年の優秀作品は、山町の山宿と伏木神社に台紙として配布している。
- 52) 4ヶ所とは、北陸銀行伏木支店の四つ角、商工会議所伏木支所跡地の四つ角、本町広場付近、臥浦町地藏院付近
- 53) 「青山宮」の世話人張杏源氏によれば、「張滾<sup>ちやうこん</sup>」は三国時代、呉の孫権の将軍として中国福建省泉州を治め、没後に青山宮が建てられ「青山王」・「靈安尊王」と称された。19世紀中ごろに台北萬華一带に疫病が広まったため、「青山王」をこの地に迎えた。
- 54) 堀田善衛「鶴のいた庭」(『堀田善衛全集5』所収、8頁、筑摩書房、1974年10月) 善衛は、この著書で「鶴屋」の離れに逗留する客人について紹介している。
- 55) 石田梅岩『都鄙問答』(加賀藩十村役、杉木家文書、富山県立図書館蔵)
- 56) 「第一編 学校と子どもの歴史」(『伏木小学校史』所収、24頁～26頁、伏木小学校史編さん委員会、昭和48年2月16日) 明治6年(1873)2月16日 伏木小学校開校
- 57) 田口俵太郎『塩屋古文書写』文化11年4月8日の条

附記・この論文は、伏木曳山祭実行委員会(会長:針山健史)により研究部会(野口安嗣)が執筆した。

・この論文を作成するにあたり、伏木図書館に調査協力を仰いだ。